

水産海洋地域研究集会
復活第4回駿河湾水産振興フォーラム「海山の海洋環境と漁場形成」
速報版

開催趣旨

天皇海山やシャッキー海膨などの公海海山域はカツオやビンナガマグロなどの回遊性魚類の集積・滞留場として知られ、遠洋カツオ一本釣りの好漁場としてその重要性は高い。また、大洋中にもかかわらず、これらカツオ・マグロ類の餌となるイワシ・サバ・サンマなど日本周辺を主な産卵場とする小型浮魚類の分布も確認されている。また、海山頂部から斜面、海底にはクサカリツボダイやキンメダイなどの底生魚類の分布も多く、海山域は大洋の中で高い生産力を有する場となっている。このように大洋中にありながら、多様な魚類の生棲場となっている公海海山域については、その海洋環境や生物生産機構、魚群の集積機構に関する知見が少なく、その実体解明は興味ある課題として残されている。本集会では、上記のような公海海山周辺海域における海洋調査結果の報告とともに、海山周辺漁場利用の現状と今後の研究・開発等の諸課題について検討する。

開催日時と場所

日時：2010年1月29日（金）13:15～17:30

場所：焼津公民館「会議室5-6通」（静岡県焼津市本町5-6-1「アトレ焼津」3階）

開催のための組織

共催：水産海洋学会、東海大学海洋学部、(独)水産総合研究センター遠洋水産研究所、マリン・インパクト21

協賛：焼津市、焼津商工会議所、焼津漁業協同組合、静岡県立焼津水産高等学校、焼津市水産教育研究会

後援：大日本水産会、漁業情報サービスセンター、日本かつお・まぐろ漁業協同組合

コンピナー

杉本隆成（東海大学海洋学部） 松村皐月（遠洋水研） 二平章（茨城大地域総合研究所）

小網汪世（マリン・インパクト21）

「海山の海洋環境と漁場形成」内容

第1部 海山の海洋環境及び水産資源と漁場形成を調査研究の立場から検討

・杉本隆成（東海大海洋学部）九州の沖合～遠州灘～銚子沖～三陸沖～シャッキー海膨～天皇海山に到る海洋環境～漁場形成及び水産資源について

・魚崎浩司（遠洋水研）焼津漁協の要請に基き、天皇海山海域のトロビンナガ、トロカツオについての資源状況及び漁場形成の問題点について

第2部 海山漁場の管理及び利用する立場からの意見

・富永温夫（水産庁資源管理部）水産庁資源管理部担当の天皇海山海域の底魚の国際的資源管理、現状と共に、「枝珊瑚」の乱獲規制と表層、中層の回遊魚についての国際的な対応の必要性

・小網汪世（マリン・インパクト21）海山漁場形成の特質と「海山」の特性を生かした調査研究方式集魚ブイ及びモニタリング・ポストについて

・明神照男（明神水産）カツオ竿釣船の漁撈長としての30年間の経験に基き、カツオ竿釣船の生残りと再生について提案を行うと共に、予測される世界の食料危機への対応として、漁業を「食料産業」「国家戦略産業」として取上げることの提言

第3部 総合討論 座長 二平章（茨城大地域総合研究所） 小網汪世（マリン・インパクト21）

出席者

当日は、焼津水産高校で開催の「平成21年度（2009年度）『地域の担い手育成プロジェクト』研究成果発表会」や焼津漁協の2010年度予算編成最終日と重なったため、当初の出席者80～100名を下回る出席者は総計38名だったが、市内の水産関係機関からは夫々1～2名の課題に適合した責任者代表を参加させてくれた。

第5回以降の焼津水産関係者の期待

2009年1月に国際協調減船による遠洋マグロ延縄64隻の減船、水産金融機関の「貸し渋り」により、全国で38隻残っていた遠洋カツオ竿釣船が11隻運行不能となったことで、2009年度の焼津港の年間取扱金額が120億円の減少（2008年500億、2009年380億円）となったことで、水産都市焼津の経済は、大きなダメージを受けたことで、「海山」を課題とした駿河湾水産振興フォーラムへの期待は、格段と高まり、次回は出来るだけ多くの関係者を参加させたいから、開催日を土曜日曜にして欲しいと云う要望が焼津漁協、焼津水産高校始め多くの機関が寄せられている。